相対化されたアプリオリとウィトゲンシュタイン

The Relativized A Priori and Wittgenstein

浅野将秀（Masahide ASANO）
東京都立大学（Tokyo Metropolitan University）

科学哲学のキー・コンセプトの中でもとりわけカントからの影響が認められるものの一つに「相対化されたアプリオリ（relativized a priori）」という概念がある。Reichenbach (1920) においてハンス・ライヘンバッハはカントのアプリオリ概念を相対化することを提唱し、アインシュタインの相対性理論に関する考察に基づいて、「（科学的）認識の対象にとって構成的である」という意味で了解されるカントのアプリオリ性は相対的なものであり、それらは数学や物理学の発展に応じて変化しうると論じる。

Friedman (2001)においてマイケル・フリードマンはこのようなライヘンバッハの着想を引き継ぎ、その哲学的含意を詳細に検討している。そこで彼は、アインシュタインを中心とする当時の物理学や数学の歴史的状況に即しつつ、ニュートン物理学からアインシュタインの相対性理論への移行には実験や観測を通じて確立された経験的法則を構成的な原理へと転じるという非経験的な契機が含まれており、その意味でこの移行には「決断」の要素が必然的に介在すると主張する。

ウィトゲンシュタインの哲学に馴染みのある人であれば、以上のようなフリードマンの考察にウィトゲンシュタイン的な思考を認めたくなるであろう。（ただし、フリードマンがこの点において実際にウィトゲンシュタインを念頭に置いているかどうかは明らかではない。）実際、規則遵守や言語ゲームの移行を含む概念形成の問題においてウィトゲンシュタインがある種の「決断」に言及していることは周知の通りであるし、またその決断を通じて生じる変化について彼が「アスペクト」や「規準」といった独自の概念に訴えていることはこのステップが何らか特別な類の概念的変容であることを示唆しているように思われる。

以上のような観点から、本発表では相対化されたアプリオリとウィトゲンシュタインの哲学という二つの思想について、それらのあいだの連続性を検討することにしたい。このような作業は「ウィトゲンシュタインとカント」というこれまで主として概略的な観点から扱われてきたトピックについて、より個別的・具体的な観点から見直すための予備的作業となるだろう。

Friedman, M. (2001). *Dynamics of Reason*. Stanford: CSLI Publications.

Reichenbach, H. (1920). *Relativitätstheorie und Erkentnis Apriori*. Berlin: Springer. (English translation: *The Theory of Relativity and A Priori Knowledge*. University of California Press. 1965.)